

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2009年の部					
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしかふ					
作者		岩崎純一					
通釈・語釈		園井長光、武田あさゑ、岩崎純一(自釈)					
作者サイト		http://iwasakiunichi.net/					
和歌ページトップ		http://iwasakiunichi.net/waka/					
詠進年月日 題		2009年の歌会・歌合	通釈	語釈	他歌人欄		
主催: 余情会	歌数:70首 歌人数:3名	『大江戸往来恋歌合』(おほえどわうらいこひうたあはせ)				評	派生歌など
2009/2/23	即詠	江戸の往来に寄せて恋を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 判者:岩崎純一					
2009/2/23	寄橋恋	渡りこぬ遠きけしきを眺めしは 夢に夢見し夜半の玉橋(たまは)	恋人がこちら側まで渡って来ない景色を眺めて終わったその場所は、それでも渡って来ることを夢見た夜中の美しい橋でした。	◇本歌取「久方の天の川に上つ瀬に玉橋渡し」(『万葉』)			
2009/2/23	寄舟恋	ひとりきくまた漕ぐ舟の波の音 (おと)水棹(みさを)かすむる明星(あかぼし)の空	私は独り、舟の上で聞く。独りで漕ぎ続ける波の音を。舟の櫂を奪い取って漂流させ、私の操をかすめ盗るのは、夜明けの金星の空。	◇掛詞「水棹×操」 ◇参照「あるが上に又脱ぎ懸くる唐衣操もいかがつもありあふべき」(大江匡衡)	◆明けの明星が棹と操を奪い取るという虚構の美しさ。(園井長光)		
2009/2/23	寄車恋	暮れ合ひの浜の小車(をぐるま)朽ち果てて沖見し朝の潮風ぞ吹く	夕暮れ時、二人に乗り捨てられた浜辺の車は朽ち果てて、朝の最後の別れ際に共に沖を見た時と同じ潮風が吹く。	◇参照「夜とともに吹上の浜の潮風になびく真砂のくだけてぞ思ふ」(定家) 「吹上の浜の真砂の潮風にみぎはの千鳥あとも残らず」(『新千載』) 「小車の簾動かす風ぞ涼しき」(『風雅』)	◆凄惨な美を描く。「小車」は、牛車だが、現代的な「車」や西洋風の馬車と解釈して、それらが浜に朽ちている退廃絵画を思い浮かべてもおかしくない、普遍性に満ちた凄惨美のある一首		
2009/2/23	寄関恋	降る雨も雲にかはる冬の関また逢坂の契りへだてて	降る雨も冬の雲に変わりゆく逢坂の関。再びあなたと逢うとの約束を隔てて。	◇歌枕「逢坂の関」 ◇掛詞「また逢ふ×逢坂」 ◇縁語「関、逢坂、へだつ」 ◇参照「これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも相坂の関」(蟬丸『後撰』)			
2009/2/23	寄追分恋	契り来し袖の移り香かれゆきてただ追分に春雨ぞ降る	約束し合ってきた袖の移り香は溜れ、二人は離れ離れになり、ただ街道の別れ際に春雨が降っている。	◇「思ひあまりそなたの空を眺むれば霞をわけて春雨ぞ降る」(俊成)	◆結句が同じ俊成歌は、雨の降る日に女性に詠んで贈った歌だが、一方この歌は、男女の別れを傍観するもう一つ目で詠まれた		
2009/2/23	寄落合恋	今日かけて待ちし涙は落合の誰がいつはりも知らぬ川波	今日まで心にかけて、あなたと落ち合うはずの場所で待ってきたのに、それも叶わないで私の涙は落ちる。その涙が誰のついた嘘のせいかも知らないのしょうね、二つの川の落ち合いに立つ波は。	◇掛詞「落ち×落合」			
2009/2/23	寄宿場恋	恋あまた行き交ふ宿に見る空もかへぬならひのかへるさの月	恋の叶う様が多く行き交う宿場町の宿の中から見ると、私にとっては、「あなたの心は他の女性に向いていて、あなたはちょうど今その帰り道にある」と取り換えることはできないという、古歌にある通りの習わしの、明け方の月が出ています。	◇本歌取「帰るさのものとや人のながむらん待つ夜ながらの有明の月」(定家)			
主催: 余情会	歌数:56首 歌人数:4名	『日本庭園恋歌合』(にほんていゑんこひうたあはせ)				評	派生歌など
2009/8/30	出題	日本庭園に寄せて恋を詠むこととした。 出題者:岩崎純一					
2009/9/5	判	判者:岩崎純一					
2009/8/30	寄八橋恋	知らざりき恋は八橋(やつはし)かけもせず夢見る池の直路(ただち)渡ると	知りませんでした。恋というものが、現実には庭園の池に曲がり角の多い八橋をかけてから渡るような悠長なものでなくて、夢の中で橋もかけずに池に入ってまっすぐ対岸まで渡るようなものだ。				

2009/8/31	寄竹垣恋	逢ふことのない枕にふしの間も竹垣くらす庭の秋風	恋人に逢ふこともなくて、枕に臥せている悲しみの間も、庭の竹垣を暗ませるような秋風が、竹の節の間を抜けてゆく。	◇掛詞「臥し×節」「暮らす×暗す」				
2009/9/1	寄蹲踞恋	我が袖は夢見し水に蹲踞(つくばひ)の清めもよその傍らの花	私の袖は恋の成就を夢見た涙に浸かり、蹲踞の傍らには、その涙の水で清める身もよそのこととして、花が咲いています。					
2009/9/2	寄燈籠恋	ひとりのみ照らす燈籠甲斐もなし世の中の町の軒にあらねば	私の身一人を照らす燈籠には意味などございませんね。かつて吉原の仲の町の軒に灯した火でもあるまいし。でも、そんな軒の火のほうが、あなたには面白かったかしらね。	◇掛詞「中×仲」 ◇江戸新吉原の盆燈籠の伝承を本意としている。				
2009/9/3	寄築山恋	ながめする園の築山いくばくのこひちを積みし名残りなるらん	私が眺めている、長雨に打たれる庭園の築山は、どれほどの泥を積んだ結果なのでしょうか、どれほどの恋路を積んだ結果なのでしょうか。	◇掛詞「眺め×長雨」「恋路×泥」				
2009/9/4	寄四阿恋	ただ四方(よも)を振り放(さ)け見ても我が恋は吹きさらす秋の四阿(あづまや)の風	ひたすら四方を見回しても、私の恋は、庭園の四阿を吹きさらす秋風のようにです。					
2009/9/5	寄添水恋	打つ衣を休めて聞けど鹿威(ししおど)しおとなふ影の幻の声	恋人が訪れた気がして、衣を打つ砧の手を休めて聞いたけれど、それは幻、庭の鹿威しの音でした。					
主催: 糸姫会	歌数:50首 歌人数:10名	『糸姫会員合 寄貝恋儀』(いとひめくわいかひあはせ かひによするこひのぎ)						
2009/10/11	貝合開催	上句と下句とがつながる貝を選び、貝が合わさるかどうかで正解を見定める貝合に書かれる歌を詠進した。貝に寄せて恋を詠んだ。趣旨は『斎宮良子内親王貝合』(1040)にならった。 原主催者:良子内親王(良子斎王)・斎宮寮女房 出題者:糸姫会					評	派生歌など
2009/9/21	寄赤貝恋儀	白妙の袖のひるまもなく暮れて闇にもほふ赤貝の色	昼間には、白い袖が乾く間もなく涙に暗れて、日が暮れたら暮れたで、闇のうちにも匂い見える赤貝のようです、私の恋は。	◇枕詞「白妙の一袖」 ◇掛詞「昼間×干る間」「暮る×暗る」 ◇対句「白妙の袖//赤貝」				
2009/9/21	寄青貝恋儀	片思ひまたは鮑のさびしさよひらかぬ貝に珠の白露	片思ひばかりして、再びあなたに会うことのない私は、寂しい鮑のようです。ひらかなない貝に真珠の玉があだに光る中、涙を流す私です。	◇掛詞「鮑×逢は(じ)」				
2009/9/21	寄白貝恋儀	我が袂いさる一人の二見瀉床の蛤夢に合はせて	私の袂は、海女が一人で貝を採りに潜る二見瀉。探ってきて寝床に置いた蛤を夢にだけ合はせて。	◇歌枕「二見瀉」 ◇対句「一人//二見瀉」				
2009/9/21	寄黒貝恋儀	ぬばたまの髪に夜を待つかひもなした暗き身の命しじみに	黒髪の黒だからと言っても、夜の闇を待つ甲斐もない。私はそうして待つ蜆貝でもない。ただ髪のように暗い我が身の命ばかりが縮む中で。	◇枕詞「ぬばたまの一髪、夜」 ◇掛詞「甲斐×貝」「縮み×蜆」				
主催: 糸姫会	歌数:50首 歌人数:10名	『糸姫会員合 寄風恋儀』(いとひめくわいかひあはせ かぜによするこひのぎ)						
2009/11/15	貝合開催	同上。風に寄せて恋を詠んだ。 原主催者:良子内親王(良子斎王)・斎宮寮女房 出題者:糸姫会					評	派生歌など
2009/11/3	寄東風恋儀	来ぬ人にかはるあしたのあるじかな床吹き寄する東風の梅の香	吹き寄せる東風(こち)に乗ってきた梅の香りは、亡くなった恋人に代わって寝室の翌朝を飾った主のようでした。	◇本歌取「あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる 色も香も昔の濃さに匂へども植ゑけむ人の影ぞ恋しき」(紀貫之『古				
2009/11/3	寄西風恋儀	ひとり見る涙に沈む夕日よりさびしさ染みて西風ぞ吹く	恋死にそうに涙に沈みながら独りで見ている夕日の西方浄土の方角から、寂しさが染みて西風が吹く。					
2009/11/3	寄南風恋儀	白南風は草の袂に夏告げてなほ我が梅雨は空に明けやらず	白南風(しらはえ)が草々に吹き、私の袂にも吹いて夏を告げ、それでも梅雨の空はまだ明けず、私の涙も明けない。	◇慣用「草の袂」				
2009/11/3	寄北風恋儀	我が恋は北吹く朝の冬の髪かきやることよ小夜床(さよどこ)の外(そと)	私の恋は、北風が吹く冬の朝の乱れた髪のように。その髪を掻きやるあなたとの寝床のことは、どこかよその話になりましたね。	◇「外(そと)」:外、他人				
主催: 糸姫会	歌数:20首 歌人数:4名	『糸姫会艶書合』(いとひめくわいえんしよあはせ)						

2009/12/6 即詠		『今鏡』や『群書類従』などに記録された『堀河院艶書合』(1002)にならい、男女間の空想の懸想文を詠むこととされた。男女それぞれが男女両方の恋を詠むこととされた。 原主催者:堀河天皇 出題者:糸姫会			評	派生歌など
2009/12/6	寄黒髪男恋	かきやるはしだれ柳のうつつかな夢に乱れぬ黒髪は見つ	現実に掻き分けるものは、貴女の黒髪ではなく、しだれ柳であるよ。貴女の乱れていない黒髪を夢に見てしまった。	◇対句「うつつ//夢」		
2009/12/6	寄黒髪女恋	黒髪の夢はまことに我が身とや嵐の柳うつつ乱れて	あなたが夢に見た黒髪は本当に私のものですか。こちらでは、嵐に遭っている柳のように、黒髪が現実に乱れているところです。	◇対句「うつつ//夢」 ◇枕詞「黒髪の一乱れ」		
2009/12/6	寄化粧男恋	うつりゆく恋の草葉の陰にだに化粧のあとを分くる益荒男	色あせてゆく恋の墓場においても、また私の死に際しても、貴女の化粧、貴女の気配が、草を掻き分けるように分かるであろう武士。	◇掛詞「化粧×気配」		
2009/12/6	寄化粧女恋	草葉には我が身の化粧(けはひ)うつらずよなほ来ぬ床に消えわびて待つ	野原の草葉には、私の化粧の跡なんて染み移っていませんわ。私は野原になど出かけず、あなたが来ない寝床で、ずっと心細くお待ちしております。	◇掛詞「化粧×気配」		